

ポーラ文化研究所 50 周年企画「よそおう わたし」

後期：2026.10/9^{Fri}→2027.4/2^{Fri} **香りと暮らす**

香りは、時代や地域の生活習俗や美意識を反映しながら、宗教儀礼や身だしなみ、優雅な遊びなど多様な役割を担ってきました。〈Art〉では、古来、人々が香りを用いていたことを示す古代ギリシアの香油壺や、ヨーロッパにおける香水文化の開花を象徴する香水瓶、日本で発展した薫香や香道にまつわる品々を紹介します。

〈Books〉では、「記憶」をキーワードに6つのテーマで展開します。形はなく目にも見えず不確か、受け止め方は人それぞれでありながら強い印象を残す香り。現代の私たちのライフスタイルにも息づく「香り」に思いを巡らせるきっかけとなれば幸いです。

Art 展示資料リスト		
資料名	国、地域、メーカー、制作	時代
鹿形香油壺	ギリシア・コリント	紀元前 6 世紀
羊形香油壺	ギリシア・コリント	紀元前 6 世紀
針鼠形香油壺	ギリシア・コリント	紀元前 6 世紀
コアガラス香油瓶	地中海沿岸地域	紀元前 6-5 世紀
卵形ケース香水瓶セット	フランス	18 世紀
くるみケース香水瓶セット	イギリス	18 世紀末
マーブル文香水瓶	イタリア	19 世紀
香水瓶「グライダー飛行」	L.T.ピヴェール	1913 年以降
香水瓶「ミツコ」	ゲラン ボトル制作：バカラ	1919 年以降
香水瓶「コルシカのジャスミン」	コティ ボトルデザイン：ルネ・ラリック	1906 年
香水瓶「ラ・ローズ・ジャクミノ」	コティ ボトルデザイン：ルネ・ラリック	1910 年頃
携帯用香水	コティ	1920-30 年頃
香水瓶「中国の夜」	ロジューヌ	1913 年
香水瓶「さしむかい」	ヤードレー	1914 年
香水瓶「カイ・サン」	コルディ	1924 年
香水瓶「夜中に」	ウォルト ボトルデザイン：ルネ・ラリック	1925 年以降
イニシャル入り銀製化粧セット		19 世紀後半-20 世紀
『香りのロマンス』	リチャード・ル・ガリエヌ著、 ジョルジュ・バルビエ画	1928 年
扇形初音蒔絵香箱		江戸時代後期
山水蒔絵香箱		江戸時代後期
檜柏蒔絵香箱		江戸時代末期
御所車型蒔絵香炉		江戸時代末期-明治時代
山水蒔絵阿古陀香炉		明治時代末期
菊模様十種香箱		江戸時代末期-明治時代
《江戸名所百人美女 小石川牛天神》*	三代歌川豊国画、歌川国久（こま絵）	安政 4 年

* 展示期間は 2026 年 12 月 18 日（金）まで。以降はパネル展示となります。

設計図

物事を作り上げるために、多くの選択肢の中から、
条件を考慮し注意深く選ばれ計画されたロードマップ。
それは時を超えて多くのことを、つくり手に語りかけています。

『ひも（ものと人間の文化史；57）』額田巖著. 法政大学出版局, 1986 [382.1]

入社した会社の業務を通じて知った回路結節をきっかけに、長年「結びの文化」を研究してきた著者が、民俗学的・人類学的アプローチで詳説した「日本のひも」文化論です。縄文時代の出土品から、パラシュートまで、歴史、宗教、風習、芸術と分野を横断した内容になっています。巻末に収録された参考文献からも、ひも文化の幅広さ、奥深さが伝わってきます。

『顔ノート：prosopometrie』山崎清著. 太陽書林, みずうみ書房（発売）, 1979 [148.1]

『わたしたちのウェルビーイングカード：ガイドブック』渡邊淳司監修/日本電信電話株式会社編. NTT 出版, 2024 [151.1]

『ヴェルサイユの宮廷生活：マリー・アントワネットも困惑した 159 の儀礼と作法』D・ガラテリア著/ダコスタ吉村花子訳. 原書房, 2023 [235.05]

『ウェルビーイングを実現するライフデザイン（ライフデザイン白書, 2024）』第一生命経済研究所著. 東洋経済新報社, 2023 [365.5]

『日本の結び』額田巖著. 講談社, 1977 [383]

『不滅のファッション図鑑：モードの歴史に連なるアイテム総覧』H・エドワーズ=デュジャルダン著/清水珠代訳. 東京書籍, 2025 [383.1]

『婚禮道具圖集（複製日本古典全集：日本古典全集）』岡田玉山著/正宗敦夫編纂校訂. 現代思潮社, 1978 [385.4]

『日本の折形：贈る心を形にかえて』山根章弘著. 講談社, 1987 [385.97]

『バッチフラワー花と錬金術』東昭史著/大槻真一郎編集協力. 東京堂出版, 2007 [499.87]

『欲望のオブジェ：デザインと社会 1750-1980』アドリアン・フォーティ著/高島平吾訳. 鹿島出版会, 1992 [501.83]

『建築家・土浦亀城：住宅の特徴と変遷』河野良平著. 白地社, 2010 [521.6]

『香料と調香の基礎知識』中島基貴編著. 産業図書, 1995 [576.6]

『香料の科学』長谷川香料株式会社著. 講談社, 2015 [576.6]

『フレグランスの ABC』日本フレグランス協会, 2011 [576.72]

『香水瓶の図鑑：フォトグラフィー』ベルナール・ガングレール著/木村高子訳. 原書房, 2014 [576.72]

『Gruau (Memoire de la mode)』フランソワ・ボド著/貴田奈津子訳. 光琳社出版, 1998 [589.2]

『ベル・エポックの百貨店カタログ：パリ 1900 年の身装文化』宮後年男監修. アートダイジェスト, 2007 [593.36]

『時の花を挿頭して：Kazasu 1953-2013（ヘアトラッドジャーナル）』中嶋幹夫編著. ヘアトラッド社, 2013 [595]

『諸国買物調方記：江戸十組問屋便覧・東京買物独案内』花咲一男編. 渡辺書店, 1972 [672.1]

『山野敬子が語る美容ビジネスの草分け山野愛子の「美道五原則」を受け継いで』「財界」編集部編. 財界研究所, 2004 [673.96]

『見立て（日本の美学；24）』日本の美学編集委員会編. ベリかん社, 1996 [701.1]

『国宝源氏物語絵巻』徳川黎明会, 徳川美術館, 2025 [721.2]

『香水瓶の世界：きらめく装いの美』マルティヌ・シャザル監修. ロータスプラン, 海の見える杜美術館, 2010 [751.5]

『化粧』木村雄之助編著/市村羽左衛門監修/市川門之助実施指導. 日本文化興隆会, 1978 [774.69]

権力

あるときは熱狂をもって、またある時には抑圧に耐える形で
受け入れられてきた力。物理的な強制力に裏打ちされたそれは、
ときにひとつの文化を形成する源ともなります。

『香り：かぐわしき名宝』東京藝術大学大学美術館，日本経済新聞社文化事業部編．日本経済新聞社，2011 [702.1]
香りを日本の文化・芸術の根幹を支える感性のひとつと位置づけ、2011年に東京藝術大学大学美術館で開催された展覧会の
図録です。4章のうち、2章分を「香りの日本文化」に充て、古代から現代にいたる日本の香りの歴史を香りにまつわる美術
工芸品とともにたどることができる構成になっています。香道、工芸などの専門家による論考や、用語集、参考文献も収録
し、読み応えのある一冊です。

- 『ギャルと「僕ら」の20年史：女子高生雑誌Cawaii!の誕生と終焉：95年からの渋谷文化』長谷川晶一著．亜紀書房，2015 [051.7]
『大奥列伝：ヒロインたちの「しきたり」と「おきて」』山本博文監修．世界文化社，2008 [210.5]
『徳川政権下の大奥と奥女中』畑尚子著．岩波書店，2009 [210.5]
『江戸が東京になった日：明治二年の東京遷都（講談社選書メチエ；202）』佐々木克著．講談社，2001 [210.58]
『町人の都大坂物語：商都の風俗と歴史（中公新書；1159）』渡辺忠司著．中央公論社，1993 [216.3]
『ツタンカーメン展：黄金の秘宝と少年王の真実：エジプト考古学博物館所蔵』畑守泰子，佐藤育子監修．フジテレビジョン，2012 [242.03]
『女王と女神：メトロポリタン美術館古代エジプト展』メトロポリタン美術館監修；東京都美術館[ほか]編．朝日新聞社，2014 [242.03]
『幕末明治の肖像写真』石黒敬章著．角川学芸出版，角川グループパブリッシング（発売），2009 [281.038]
『マリー・アントワネット』ジョーン・ハスリップ著/櫻井郁恵訳．近代文芸社，1999 [289.3]
『鹿鳴館貴婦人考（講談社文庫；こ-16-1）』近藤富枝著．講談社，1983 [367.21]
『博士の肖像：人はなぜ肖像を残すのか』木下直之編．東京大学総合研究博物館，東京大学出版会（発売），1998 [377.28]
『日本古代の櫛文化と髪型』大熊久貴著．雄山閣，2026 [383.5]
『ガラスの文明史』黒川高明著．春風社，2009 [573.5]
『フレグランス：クレオパトラからシャネルまでの香りの物語』E・T・モリス著/中村祥二監修/M・クリスティーン，沼尻由起子訳．求龍堂，1998 [576.6]
『ブルガリアンローズ：香り高きオールドローズの世界』佐々木薫著．BABジャパン出版局，2005 [576.6]
By Eugene Rimmel ; with above 250 illustrations by Bourdelin, Thomas, etc. *Book of perfumes*. Kessinger Publishing, 2004 [576.72]
『シャネル No.5 の謎：帝政ロシアの調香師』大野斉子著．群像社，2015 [576.72]
『海を渡った江戸の和紙：パークス・コレクション展』紙の博物館，1994 [585.6]
『香木のきほん図鑑：種類と特徴がひと目でわかる』山田英夫著．世界文化社，2019 [617.6]
『百香繚乱：高砂コレクション香りの図鑑：特別版』富田章，森谷美保監修．高砂香料工業，2020 [751.508]
『燦々漆蒔絵：初音調度の源流を求めて：秋季特別展』徳川美術館，1993 [752.6]
『小袖：江戸のオートクチュール：松坂屋京都染織参考館の名品』名古屋市博物館[ほか]編集．日本経済新聞社，2008 [753.2]
『ティアラ展：プリンセスの輝き』Bunkamura ザ・ミュージアム，日本テレビ放送網編集・翻訳．日本テレビ放送網，2007 [755.3]
『愛のヴィクトリアン・ジュエリー：華麗なる英国のライフスタイル』平凡社，2010 [755.3]
『金工事典』若山泡沫著/飯田一雄校訂．刀剣春秋新聞社，1999 [756.6]

先入観

それにとらわれるのは、あなた自身が重ねてきた経験があるから。
自由な発想を妨げると、とかく悪者扱いされがちですが、
個人の美意識に裏付けられた独自の視点とも言えそうです。

『高等女学校と女性の近代』 小山静子著. 勁草書房, 2023 [376.5]

明治期に登場した「高等女学校」で行われた女子教育を明らかにすることで、良妻賢母教育、ひいては日本の女子教育史を明らかにしようという内容です。長年日本教育史・ジェンダー史を専門としてきた著者が、自身が学生時代に抱いた疑問をきっかけに、高等女学校が果たした役割や意義、女性が学校教育を受けることの意味、さらには女性にとっての近代を問うています。

『第一印象の科学：なぜヒトは顔に惑わされてしまうのか?』 A・トドロフ[著]/中里京子訳/作田由衣子監修. みすず書房, 2019 [141.51]

『家族と子供の江戸時代：娯と消費からみる』 高橋敏著. 朝日新聞社, 1997 [210.5]

『徳川「大奥」事典』 竹内誠[ほか]編. 東京堂出版, 2015 [210.5]

『秋田美人の謎』 新野直吉著. 白水社, 1984 [212.4]

『小野小町ものがたり：秋田の文化入門講座（んだんだブックレット）』 小野一二著. 無明舎出版, 2005 [289.1]

『偏見というまなざし：近代日本の感性（青弓社ライブラリー；13）』 坪井秀人編著. 青弓社, 2001 [361.4]

『未来思考コンセプト：ポスト SDGs のビジョンを描く』 電通未来事業創研著. クロスメディア・パブリッシング, 2025 [366.1]

『女官通解（講談社学術文庫, 670）』 浅井虎夫著. 講談社, 1985 [367.1]

『キレイならいいのか：ビューティ・バイアス』 デボラ L.ロード著/栗原泉訳. 亜紀書房, 2012 [367.1]

『女の子は本当にピンクが好きなのか：Think PINK』 堀越英美著. P ヴァイン, 2016 [367.1]

『ウェディングドレスはなぜ白いのか』 坂井妙子著. 勁草書房, 1997 [383.15]

『コルセットの文化史』 古賀令子著. 青弓社, 2004 [383.15]

Edited by Sonnet Stanfill, Lynda Caston. *Schiaparelli : Fashion Becomes Art*. V&A Publishing, 2026 [383.153]

『レディーの赤面：ヴィクトリア朝社会と化粧文化』 坂井妙子著. 勁草書房, 2013 [383.5]

『お歯黒の研究』 原三正著. 人間の科学社, 1981 [383.7]

『視覚とマンガ表現：科学とマンガのナベ《鍋?》ゲーショ』 牧野圭一, 上島豊共著. 臨川書店, 2007 [491]

『家事の政治学』 柏木博著. 青土社, 1995 [590.4]

『トップモデル：きれいな女の汚い商売（文春文庫；ク-8-1）』 マイケル・グロス著/吉沢康子訳. 文藝春秋, 1996 [593.3]

『キレイでつかめ!就活ビューティ BOOK』 花王ソフィーナ編集協力. 宝島社, 2013 [595]

『美女とは何か：日中美人の文化史』 張競著. 晶文社, 2001 [701.5]

『身体のエステティク：ひすとりあ・こるぼれあ』 池澤康郎著. ポーラ文化研究所, 1982 [704.41]

『ジョルジュ・バルビエ画集：永遠のエleganceを求めて』 ジョルジュ・バルビエ[画]/鹿島茂著. 六耀社, 2008 [726.5]

『Fairy tale mode；おとぎの国のモードをさがして』 山下彩華編著. 青幻舎, 2026 [726.5]

『色のコードを読む：なぜ「怒り」は赤で「憂鬱」はブルーなのか』 ポール・シンプソン著/中山ゆかり訳. フィルムアート社, 2022 [757.4]

もとは生物学などで「種」や「属」などを表す genus がスタート。
古い分類の仕組みとして使われていたものが、今では社会的な
意味合いを含むようになって、論争センサー発動の引き金に。

gender

『マリー・アントワネット・スタイル』読売新聞東京本社、横浜美術館, 2026 [289.3]
ヴィクトリア・アルバート博物館が企画し、2026 年 3 月まで同館で開催された同名の展覧会の日本開催図録として発行されました。ロンドン展の内容を一部再編集するとともに日本展のみでの出品作を加え、約 200 点の作品が収録されています。詳細な作品解説や年表、作家作品を収録し、写真集として楽しむだけでなく、マリー・アントワネット解釈のための資料としても活用できる内容です。

- 『からだは語る：身体性とジェンダーの精神分析 (Em-body)』A・レマ著/鍛冶美幸, 村井雅美訳/町田奈緒士監修. 木立の文庫, 2025 [146.1]
『お世継ぎのつくりかた：大奥から長屋まで江戸の性と統治システム』鈴木理生著. 筑摩書房, 2006 [210.5]
『冒険する女の世紀：男装の女性史』中田耕治著. 新書館, 1983 [280.4]
『華族家の女性たち』小田部雄次著. 小学館, 2007 [281]
『偏見や差別はなぜ起こる?: 心理メカニズムの解明と現象の分析』北村英哉, 唐沢稜編. ちとせプレス, 2018 [361.4]
『男という病：男らしさのメカニズムと女のやさしさ』ヴィルフリート・ヴィーク著/梶谷雄二訳. 三元社, 1991 [367]
『〈男らしさ〉のゆくえ：男性文化の文化社会学』伊藤公雄著. 新曜社, 1993 [367]
『デジタル社会の多様性と創造性：ジェンダー・メディア・アート・ファッション (明治大学リバティブックス)』田中洋美[ほか]編. 明治大学出版会,丸善出版 (発売), 2023 [367.1]
『わかりたいあなたのためのフェミニズム・入門』別冊宝島編集部編. JICC 出版局, 1990 [367.2]
『烏帽子と黒髪：中世ジェンダー考 (いにしへびとの世界 ; 1)』野村育世著. 同成社, 2024 [367.2]
『戦中戦後の女性 (日本女性の歴史 ; 13)』井上靖, 円地文子全巻監修/吉見周子本巻編集指導. 暁教育図書, 1979 [367.21]
『「女子」の誕生』米澤泉著. 勁草書房, 2014 [367.21]
『性差 (ジェンダー) の日本史：企画展示』人間文化研究機構国立歴史民俗博物館, 2020 [367.21]
『日本女性のライフコース：平成・令和期の「変化」と「不変」』樋口美雄[ほか]編. 慶應義塾大学出版会, 2023 [367.21]
『スーツの神話 (文春新書 ; 096)』中野香織著. 文藝春秋, 2000 [383.14]
Kate Bethune ; with illustrated by Mette Kaada. *A to Z of wedding style*. V&A Publishing, 2014 [385.4]
『日本洋装下着の歴史』日本ボディファッション協会編集委員会編. 文化出版局, 1987 [589.2]
『闘う衣服 (叢書記号学的実践)』小野原教子著. 水声社, 2011 [589.2]
『東京女子高制服図鑑』森伸之著. 弓立社, 1985 [589.21]
『女用訓蒙図彙 (家政学文献集成続編江戸期 ; 8)』奥田松柏軒著/田中ちた子, 田中初夫編ならびに解説. 渡辺書店, 1970 [590.2]
『愛と美の女神ヴィーナス：ギリシア神話から現代へ』長田年弘監修. 名古屋ポストン美術館, 2009 [706.9]
『モダン美人誕生—岡田三郎助と近代のよそおい』ポーラ美術振興財団ポーラ美術館, 2018 [706.9]
『江戸の絵すごろく：人気絵師によるコマ絵が語る真実 (FUTABASHA SUPER MOOK)』山本博文監修. 双葉社, 2018 [721.8]
『絵すごろく：遊びの中のあこがれ』東京都江戸東京博物館, 1998 [721.9]
『弥生美術館：大衆のところに生きたさし絵画家たち』弥生美術館, 1990 [726.5]
『タータン：伝統と革新のデザイン』富田智子, 養父尚三[ほか]企画・構成/廣瀬歩編. 青幻舎, 2018 [753.3]
『アイドルにっぽん』中森明夫著. 新潮社, 2007 [770.4]
『美男の立身、プ男の逆襲 (文春新書 ; 440)』大塚ひかり著. 文藝春秋, 2005 [910.2]

センサー

ヒトの感覚に代わり、特定の信号を検出する検知装置は、
光で、音で、振動で、目には見えない感覚を可視化します。
そして今まで気づかなかったことに目を向けるきっかけになる予感も。

『ヘアスタイルと美容師の歴史〈改訂版〉』ポール・ジェルボ著、川久保輝興訳。日本美容専門学校、2011 [595]
古代エジプトから20世紀までの西洋の髪形史です。タイトルにあるように、ヘアスタイルを作り上げる coiffeur（理髪師・美容師）に光を当て、男性のひげの流行も取り上げています。モノクロですが、ヨーロッパ各地の博物館に収蔵されるヘアのための道具や調髪の様子を描いた絵画も多く掲載しています。絵画作品から髪形をイラスト化して紹介する『欧米理容美容の歴史』などと併せて参照すると理解が深まるでしょう。

- 『新聞報道と顔写真：写真のウソとマコト（中公新書；1431）』小林弘忠著。中央公論社、1998 [070.14]
『質感の科学：知覚・認知メカニズムと分析・表現の技術』小松英彦編。朝倉書店、2016 [141.2]
『美しさと魅力の心理』三浦佳世、河原純一郎編著。ミネルヴァ書房、2019 [141.5]
『色に出でにけり：身分と差別』大阪人権博物館、1998 [210.1]
『顔の考古学：異形の世界史』設楽博己著。吉川弘文館、2021 [210.2]
『ライフスタイルの社会学：データからみる日本社会の多様な格差』小林盾著。東京大学出版会、2017 [361]
『「見た目」依存の時代：「美」という抑圧が階層化社会に拍車を掛ける』石井政之、石田かおり著。原書房、2005 [361.4]
『イメージ・ファクトリー：日本×流行×文化』ドナルド・リチー著/松田和也訳/ロイ・ガーナー写真。青土社、2005 [361.5]
『禁忌習俗語彙』柳田國男著。国書刊行会、1975 [380]
『匂いの力』八岩まどか著。青弓社、1995 [382.1]
『油壺集め』山下忠平著。光芸出版、1974 [383.5]
『色とにおいの科学（パリティブックス）』パリティ編集委員会編/大槻義彦責任編集。丸善、2001 [425.7]
『身近な「匂いと香り」の植物事典：自然が生み出した化学の知恵』指田豊著。BAB ジャパン、2023 [471.3]
『〈清潔〉の近代：「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ（講談社選書メチエ；98）』小野芳朗著。講談社、1997 [498.021]
『明治・父・アメリカ（新潮文庫；草 98=17）』星新一著。新潮社、1978 [499]
『暮しのなかの匂い』小幡弥太郎著。毎日新聞社、1959 [576.6]
『香料植物（ものと人間の文化史；159）』吉武利文著。法政大学出版局、2012 [576.6]
『COTY：香水の帝王と呼ばれた男』遠藤賢朗著。里文出版、2013 [576.72]
『スウィング・シックスティーズ：ファッション・イン・ロンドン1955-1970』C・プリュワード[ほか]監修/古谷直子訳。ブルース・インターアクションズ、2006 [589.2]
『ポワレとフォルチュニ：20世紀モードを変えた男たち』河村三枝子[ほか]編。東京都庭園美術館、2009 [589.2]
『調香師が語る香料植物の図鑑』フレディ・ゴズラン、グザビエ・フェルナンデス著/前田久仁子訳。原書房、2013 [617.6]
『銀座百年の定点観測：小間物商原田久兵衛伝』原田豊著。風媒社、1988 [673.7]
『中国・清朝の香り：鼻煙壺：知られざる美術工芸品《嗅ぎたばこ入れ》』豊田町香りの博物館、2000 [751.5]
『着物と日本の色：着物で綴る日本伝統色』弓岡勝美監修・コレクション。ピエ・ブックス、2005 [753]
Rene Lalique, Yvonne Brunhammer[et al.]. *The jewels of Lalique*. Flammarion, [1998] [755.3]
『和の意匠にみる文様の名の物語』木村孝著/世良武史写真。淡交社、2005 [757]
『日本の香：薫物香木香道フレグランス今につながる1500年の香文化と美』日本香堂監修。誠文堂新光社、2025 [792]
『感覚の近代：声・身体・表象』坪井秀人著。名古屋大学出版会、2006 [910.26]
『私の身体を生きる』島本理生[ほか]著。文藝春秋、2024 [914.68]

安定した充足感と、チャレンジしたい気持ちの間で揺れ動く感情は、
背中を押してくれる力を欲しがっているのかもしれません。
最初の一步を踏み出すために、入念に準備された設計図に
従ってみるのも良いかもしれません。

きっかけ

『ディオスコリデス薬物誌』ペダニウス・ディオスコリデス著、岸本良彦訳。八坂書房、2022 [499]
紀元1世紀後半に活躍した、ローマの医師による5巻からなる薬学書の完訳版です。同時代に成立したプリニウスの『博物誌』に並ぶ、古代の知の集大成とされています。地中海世界を中心に、ルネサンス期まで読み継がれ後世に大きな影響を与えました。軍医として各地を旅した際の実地研究をもとに、生薬として有効とされてきた動植物と鉱物827項目について、用法や調合法を紹介しています。

- 『創刊号のパノラマ：近代日本の雑誌・岩波コレクションより』うらわ美術館、2004 [051]
『国風文化：貴族社会の中の「唐」と「和」（シリーズ古代史をひらく）』吉村武彦[ほか]編。岩波書店、2021 [210.37]
『大江戸異人往来（丸善ブックス；036）』タイモン・スクリーチ著/高山宏訳。丸善、1995 [210.5]
『F.ベアト幕末日本写真集』横浜開港資料館、横浜開港資料普及協会編。横浜開港資料館、1987 [210.58]
『大君の都：幕末日本滞在記；上 中 下（岩波文庫）』オールコック著/山口光朔訳。岩波書店、1962 [210.58]
edited and with a historical text by C. Worswick ; introductory essay by Peter Grilli. *Japan, photographs, 1854-1905*. Pennwick, 1979 [210.6]
『明治大正の新語・流行語：「ことば」を通して時代を知る（角川選書；63）』槌田満文著。角川書店、1983 [210.6]
『バブル文化論：〈ポスト戦後〉としての一八八〇年代』原宏之著。慶應義塾大学出版会、2006 [210.76]
『モボ・モガが見たトーキョー：モノでたどる日本の生活・文化』たばこと塩の博物館、2018 [213.6]
『パリの皇族モダニズム：領収書が明かす生活と経済感覚』青木淳子著。KADOKAWA、2014 [288.44]
『過剰可視化社会：「見えすぎる」時代をどう生きるか（PHP新書；1307）』與那覇潤著。PHP研究所、2022 [304]
『日本経済の歴史：列島経済史入門〈第2版〉』中西聡編。名古屋大学出版会、2023 [332.1]
『流行の社会心理史』市川孝一著。学陽書房、1993. [361.5]
『アール・デコとモード』三菱一号館美術館、京都服飾文化研究財団、粕川雅編集。三菱一号館美術館、2025 [383.1]
『植物と神話：花と木とロマンの詩』近藤米吉編著。雪華社、1973 [470.49]
『薬学史事典』日本薬史学会編。薬事日報社、2016 [499.02]
『ものづくり日本の源流：近代国家をつくりあげた機械職人たちの系譜をたどる』酒井陽太著。方丈社、2016 [509.21]
Marie-Christine Grasse. *Femmes de parfum : visages d'hier et d'aujourd'hui*. Milan, 1996 [576.72]
『ルバルフアンある感覚：1900-2011』マリ＝クリスティーン・グラース[ほか]著/地引由美翻訳・監修。フレグランスジャーナル社、2015 [576.72]
『ファッション中毒：スタイルに溺れ、ブランドに操られるあなた』ミシェル・リー著/和波雅子訳。日本放送出版協会、2004 [589.2]
『「きれいになったね」と言わせる28の美格言：持って生まれた美しさ、まだまだ花開くってご存知ですか?』ポーラ著。集英社、2014 [595]
『香りある樹木と日本人：木の香りある日々の暮らし（生活文化史選書）』岡岡利幸著。雄山閣、2018 [658.3]
『美婆伝：90歳を超えても美しく働き続ける11人の物語』土本真紀著。講談社、2012 [673.3]
『広告（ものと人間の文化史；130）』八巻俊雄著。法政大学出版局、2006 [674.21]
『マダム貞奴：世界に舞った芸者』レズリー・ダウン著/木村英明訳。集英社、2007 [772.1]

▼ 植物性

鬱金	うこん	インド原産のショウガ科の多年草で、地下に太い根茎がある。苦みと土様感のある香りが特徴。香辛料としてはターメリックの名で知られ、染料や薬用にも用いられる。
藿香	かっこう	英名パチュリ。東南アジア原産のシソ科の多年草。インドでは古くから防虫剤や香りづけに使われており、エキゾチックな香りとしてヨーロッパで人気を集めた。
桂皮	けいひ	クスノキ科の常緑高木ニッケイの樹皮。甘く温かなスパイスの香りで、シナモンやニッキの名でも知られる。漢方では発汗・解熱、鎮痛薬として用いられる。
山奈	さんな	ショウガ科の多年草バンウコンの根茎を乾燥したもので、ショウガ様の清涼感がある香りが特徴。インド・マレー原産で江戸時代中頃に日本へ伝わり、薬用や鑑賞用にも栽培された。
沈香	じんこう	英名アガーウッド。アクィラリア属の樹木の木質部に、様々な外的要因によって樹脂が凝結。長い年月を経て熟成されたもので、香りは甘みと深みを感じさせる。「沈水香木」を略して沈香とよばれる。薬用では鎮静・解毒・健胃に用いる。
大茴香	だいういきょう	英名スターアニス。マツブサ科の常緑高木でトウシキミともいい、果実を乾燥して用いる。八角とも呼ばれ、中国料理に欠かせない香辛料の一つ。甘く華やかなアニス様の香りが特徴で、アルコール・菓子類・医薬品の香料にも使われる。
丁子	ちょうじ	英名クローブ。モルッカ諸島原産のフトモモ科の常緑高木の花蕾を乾燥したもの。精油 16～20%を含有し、刺激的で甘いスパイスの香りが特徴。薬用としては健胃、鎮嘔、鎮痛に使われる他、香辛料、歯科での消毒・防腐・止痛剤、刀剣の防錆料など多方面の用途がある。
乳香	にゅうこう	英名オリバナム、フランキンセンス。アラビア海沿岸部やアフリカ北東部などに生育するカンラン科ボズウエリア属の樹木から滲出した樹脂で、爽やかさと甘さを併せ持つ香りが特徴。最古の薫香料の一つで、古代エジプトでは「神のもの、さらに神そのもの」と考えられていた。
白檀	びやくだん	英名サンダルウッド。ビャクダン科の常緑高木で、甘くやわらかな香りが特徴。薬用、薫香、彫刻工芸品、防虫などに幅広く利用され、精油は調合香料の素材としても多用されている。
没薬	もつやく	英名ミルラ。アフリカ北東部やアラビアなどに分布するカンラン科コンミフォラ属の樹木から滲出した樹脂。重厚で苦みを感じさせる樹脂香が特徴。防腐効果があるためミイラ作りに欠かせない材料だった。
竜脳	りゅうのう	スマトラ・ボルネオ原産で、フタバガキ科リュウノウジュの心材の空隙に析出した結晶。鋭い清涼感を持つ香りが特徴で、古くから薫香料や防虫剤として用いられた。マルコ山古墳（奈良県明日香村）の出土品から竜脳の芳香が確認されて話題となった。

▼ 動物性

貝香	かいこう	アフリカ東北部沿岸に生息する巻貝の蓋で、中国・日本では甲香ともいう。独特の動物性香気を持つ。香りを長く保つ効果があり、保香剤によく使われる。
麝香	じゃこう	英名ムスク。麝香鹿の雄の香囊の分泌物で、古くから高貴な香料として珍重されてきた。香りには甘く温かみがあり、動物的なニュアンスを感じさせる。漢方では興奮・強心・鎮静などに用いる。
竜涎香	りゅうぜんこう	英名アンバーgris。マッコウクジラの体内にできる蠟状物質の塊で、ほのかな甘さと奥行を感じる香りが特徴。香水に使用すると香りの持続性を高める保香効果がある。

参考文献

谷田貝光克編、香りの百科事典、丸善株式会社、2005-1-31

日本大百科全書（ニッポニカ）、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=1001000060343>、(参照 2026-10-05)